第十四回　美しい日本語で詩を聴く会

朗読詩集 2026.7.4

お題「かばん」

① 通勤鞄　上村多恵子
② 贈物のかばん　下田喜久美
③ かみさまの鞄　北原　千代
④ かばん　もみにゃーじ
⑤ 虚（うろ）　波野　仁
⑥ かばん　清水崇彦
⑦ かばんの中　スノードロップ
⑧ ボクはカバンの中　春名江吏子
⑨ 深夜便　すみくらまりこ
⑩ 鞄　吉村侑久代
⑪ 箱…父のチェスト　石田真弓
⑫ 霧の中　有馬　敲

①

通勤鞄

上村多恵子

何を忘れたかを想い出すのに
費やした時がまわりはじめると
いてもたってもいられなくなり
通勤鞄の点検を始める

通勤鞄の傷みが速くなった
くたびれた形に
とめ金がゆるい
この疲弊状態からすると
償却は定率の五倍増しで力つきる

時代のカーテンに針で突くような企画書は
フィットで収まるけれど
出してもすぐ又鞄に入れなくてはならない
しかし期日までに提出しなければ
人生の重加算税が待っている
耳を圧迫するイヤリングは
いつも片方だけ底にころがり
遠くの音への羨望をふさぐ
アドレス帳の中が
空っぽになってしまったら
いよいよ明日から前世の恋人の

名前を調べよう
「地球にやさしい」再生紙で
つくられた名刺は
鞄の中で縦皺をつのらせている
昨日と今日の区別を

ファウンデーションでぬりこめると
仮面劇の幕が降ろされた

さて「協業化の飛躍的向上」のプラン書と
神社の地鎮祭への寄付の払込票とを
鞄のどのチャックの中へ一緒に入れるのだ
春の化粧品の案内のハガキと
ニッポン再構築のパンフレットと
クリーニング代の領収書を点検し
獣の皮に
ブランドマークをはりつけた鞄を下げる

何かを忘れているのだけれど
空気のさけ目からまき戻されないまま
通勤鞄を両手で高く持ち上げ
強く揺すってみる

②

贈物のかばん　下田喜久美

母も父も
何処迄目指すかは言ってくれなかった
私は一人で模索していた

与謝野晶子の母校
今は府立泉陽高校だ
そこの文芸部にわたしは入って
泉陽文芸冊子を発行する
広告を取りに商店街を歩いた
各店舗さんはみな優しく
広告を出してくださった
冊子に詩を私は書いた

父の経営の貿易会社が
倒産に遭って大学は断念
やむなく三越百貨店宣伝部
コピーライターとして働いた

新聞広告全般
キャッチフレーズの考案
ダイレクトメールの文案
各新聞社への催しの紹介

目まぐるしい日常が待っていた
各市役所のコピーライター教室に
いつの間にか講演していた

その時私の友は

着物学園を開いて絵も描いていた
彼女からある日大きなカバンを戴いた
「お祝いよ」という
緑色の注文仕立ての立派な本革のカバン

ここに何を入れるのだろう

余りに立派で私は使わずに
大切に飾っておいた
なんて気っぷのいい人なのだろう

あれから私の心の中のカバンには
何が入っただろうか

同志社大学の講堂での詩の朗読
ドーンセンターでの与謝野晶子の講演

マケドニア、ルーマニアでの国際詩祭や
フィリピンの港調査、平和活動への参画

貴女が下さったカバンには
沢山の夢と
尽きない夢を
一杯詰めてきたのです

すぐに使わなかったカバンだけれど
今もまだ詰め込もうとして努力する
心を詰めて
平和への切望
飽くなき詩作への思い

尽きせぬ夢を詰め
尽きせぬ宇宙への命の歌を

歌いつづけたいと
あくせくして
さらに膨らんでいく
カバンを見詰めている

③

かみさまの鞄

北原千代

そのひとが鞄をあけると
草原が入っていた
とがった葉先に足首をくすぐられながら
わたしは歩いていった
むらさきの矢車草が群れ咲く斜面に
そのひとが立っていて
きみもこの花を好きでしょう　といった

そのひとが真新しい法曹の鞄をあけると
未来が入っていた
みずみずしい林檎をひとつ鞄からとりだして
みなが等しく林檎を食べられるよう
正義のために働く　といった

幾十年が経ち出会ったそのひとが鞄をあけると
発熱するものがあり
錠剤でふくらんだ薬袋だった
とっさにかぶせたハンカチの下に
晩夏の一日を啼く蟬の声を聞いた

いまは地球のどこをさがしても見つからない
そのひとも鞄も　けれど
夕方の駅や　みずうみの見える喫茶店の
紅茶碗のゆらめきの先に
あの鞄の匂いがよぎるとき
陽の名残りの原っぱのうえを　わたしは歩いて
夕陽を沈めた小川にくるぶしまで浸かり
ちいさくあかるく灯っては飛び交う蛍を

てのひらに置きさえする　そして夜の深み

閃光のように知ったのだ
かみさまも鞄をもっていらして
そのひともわたしも　包まれて在ると
星たちや星雲の浮かぶ
無辺際の鞄のなかに

④

かばん　　もみにゃーじ

結婚の三年後。
突然行くことになった台湾旅行。
（あれが新婚旅行だったのか）
夫のつもりがまだ聞けずにいる。

あのとき揃えた大きなかばん。
夫のは紺色。
わたしのは気恥ずかしくなるような
桜色。

普段の旅は軽装だったので
あんなに大きなかばんを持つのは
初めてだった。
飛び切り充実してた旅行だった。
でもお土産は高くて、
二つのかばんはほとんど空っぽだった。

２０２３年。
ＣＳ化学物質過敏症が
悪化したわたしは
新築隣家の塗装を避けて、
急きょ荷造りをして
実家へ逃げた。
あの時のかばんにテラヘルツを応用した
布団セットを詰め込んで。

⑤

虚（うろ）　波野　仁

錆びた躰（み）を引きずっていると
僕の鞄に
もつれた髪の様な
無数の細い白い手が集（たか）って
ゴソゴソゴソと弄（いじ）り
ポロポロポロと溢（こぼ）す
それでも僕は錆び付いているので
身動（みじろ）ぎも出来ず
ただ喪失（そうしつ）する意識を呑み込むだけ
やがて放埒（ほうらつ）な宴（うたげ）は終わり
全て漁（あさ）られた鞄に

何処からともなく一羽の小鳥が舞い降り縁（ふち）に留
（と）まり
囀（さえず）り始めた
♪Cogito, ergo sum　Cogito, ergo sum（コギトエルゴ
スム、コギトエルゴスム）と、小鳥は一頻（ひとしき）
り唄った後（のち）
霧散した
僕は錆びた手足動かし
ギシギシギシギシ
不様（ぶさま）に近寄り
白濁した瞳で
ギョロギョロギョロギョロ
辺りを見回し
鞄を覗（のぞ）く
パンドラの箱には
希望が残っていたが

僕の鞄には何が残っているのか
不安に苛（さいな）まれつつ
虚（うつ）ろに開いた闇に
眼を凝（こ）らす
やがて淡く浮かんで来たのは
色即是空の散在した
破片

⑥

かばん

清水崇彦

ショルダーバッグ 手提げバッグ
革製 ズック製 茶色 緑 黒
もう役目を終えたかばんたち
どれもみな 私の旧友だ
思いを抱え どこへでも行った
今でも 特別の親しみが湧く

だが 無用となった今 かばんは
いったいどんな存在なのか
既に 物を運ぶ使用価値はない
存在する意義はない

抜け殻のようなもの もはや
意味としての存在ではない

私に使われる 故に かばんには
存在理由があった かばんは
常に 私に帰属する
私あってこその存在だった
私とは無関係な
独立した在り様ではなかった

ならば 今 私という主を失って
かばんは不幸なのだろうか
否 そうではあるまい むしろ
一つのモノとして 自立した存在
私がどうあろうとも 確かに
そこにある存在になった

意味としての存在から
事実としての存在になったのだ
かつては 〈私の〉かばんだった
しかし 今は誰の所有でもない
私との記憶の感傷を捨て
その姿は誇らしげでもある

いささか擦り切れ 染みの数々は
時の流れを物語るが たとえ
私が世を去ろうが〈元〉かばんは
端然と モノとして存在し
片や それらが無くなろうと
私は私で なおも生き続ける

⑦

カバンの中

スノードロップ

この仕事が終わったら
今度の休みになったら
明日の会合が終わったら
そしたら
カバンの中を整理しよう

これもそのときに
あれもそのときに
それもいっしょに

そうして
カバンの中が膨らんで

今日こそは
今月中には
今年中には
そうして
カバンの中は待ちぼうけ

そんなカバンはどこにもないけれど
もう何年もずっとそんな気がして
何が入ってるいかも忘れてしまいそうで
それでも捨てられず

後回しにしたつけをおそれて・・・

いや、この夏までには！

⑧

ボクはカバンの中　春名江吏子（えり）

ボクは暗くて湿ったカバンの中
カバンが跳ねたらボクはおお揺れ
眼も開かない体毛もない丸裸の赤子
五感のうち臭覚と体毛をつかむ腕力だけで
這い上がりカバンの底へドスンと着地
真っ暗なカバンの中でボクの口唇と
命を育む乳頭が胎盤のように
一つになって離さない離れない
遺伝子の継承と野生の不思議な力だけ

数か月後ボクは光を感じてカバンの口を
こじ開けた　朝日がまぶしい
カバンの主はお母さん
はじめてお目にかかります
人々はカンガルーの赤ちゃん誕生と
祝いはしゃいだ　おめでとう
ようこそ光の世界へいらっしゃい

⑨

深夜便　すみくらまりこ

関西空港の
深夜便ロビーは
今この時間に
飛び立つ人々がいる
そこに私は居ない

深夜便
仕事を終えて向う
待ち人あるとき

旅とは深刻な
人生の崖のよう

深夜便
関西空港は静か
熱狂の空気は
どこへ行ったのか
見送る人もなくて

深夜便
しゅんしゅん
しゅんしゅん
暗闇を飛び続けて

心に積もった
塵を落としたとき
窓の外に陽が昇る

銀色の旅行鞄が
行きたがっている
まだお役にたてますよ
元気を出してください

深夜便
行く夢をみる
人々に会って
ハグの嵐に

頬を染める私を
旅行鞄はみている

⑩

鞄

吉村侑久代

初めての鞄は
茶色の革のランドセルだった
そのランドセルには
茶色の地色に目立つように
白い百合の花が彫られていた

わたしは百合の花を嫌いではなかったが
白い百合はどこか寂しげで
新しくできた友だちの様に
赤い薔薇が浮き彫りになった

ランドセルに憧れた
父にも母にも
わたしの好みを一言も言わなかった

梅雨が終わると
細長い京の町家の中庭に
胡蝶花と呼ばれる
白い著莪(シャガ)の花が咲いた
「わたし　この花　何か好きとちがうねん」と
弟に言ったけど
花のことなど無関心な弟は
「どんな花でも　庭にはええやん」と
言っただけでどっかに行ってしまった

蝶が石に止まっているような
著莪の咲く庭で
わたしは今も
百合の模様のランドセルを
背負っている

⑪

箱……父のチェスト　石田真弓

頑丈な大型のトランクだった
横に鉄の蝶番が付いた魅せられる箱
西洋の匂いがした
父の部屋の片隅にそれはあった

子供の頃
大事な書類はすべてそこに入っていた
神妙にまるで儀式のように
鍵を開ける父を眺めていた

小学生のわたし

一人息子を安易に認めない
厳しい祖父との確執
家を出たくても出られない跡継ぎ
夢を断たれた挫折感のある父の想いを
そのトランクだけは知っていた

大人になった私は
帰省した夏座敷で
父に願った
あのトランクが欲しいの
父はしばらく無言だった

あれはトランクではなくて
チェストって言うんだ
……あれは、
まだあげられん

寝タバコ
タバコの焦げ跡のある枕元の畳
まるで
たった一人の親友のように
絶対の味方のように
片隅にあったチェスト

プライドが高く繊細で優しい父だった
しかし、父には
決して手放せない物があったのだ
これは妙な喜びでもあった
生きるということは執着なのだ

その一年後
父は亡くなった

代は代わった
実家は新築の家になっていた

あのチェストはどこ？

あのチェストはどこ？
あんなにも素敵な箱だったのに！
あんなにも欲しかったのに！
それはもうどこにもなかった
棄てられていた
価値観とはこんなものだ

他の者にはどうでもいい古びた箱
そこには
父の果たせなかった想いが詰まっていた
母にも子供たちにも
誰にも分からない
父の夢が…

私は以来
箱に魅せられる女になった
小さな箱でも大きな箱でも
箱狂い

箱には秘密がある
箱にはロマンがある
箱には想いが隠る

人はいつか誰も
柩という箱に入るが

そこには永遠へと転生する
遥かな夢が潜むのだ

⑫

霧の中

有馬 敲

おれは霧のなかに生まれ、霧のなかに育った　そしていま
おれは霧のなかに住んでいる
四方を山にかこまれた小さな盆地　そこでは深い霧のなか
で　いつも壁のようなものが眼の前に立ちはだかってきた
家とか土塀とか堤防とか

それに耐えられなくなったとき　稲田のまんなかを半円形
に走るローカル線のレールに揺られて　この地方を脱け
おれは遠い海へ出かけていった　とつぜん　視界にひろが
る海原をみた少年のころのときめきが　かすかな潮のざわ
めきとともによみがえってくる

しかし　水平線のみえるはずの海にも霧は立ちこめていた
おれは岩壁のそばの小屋にはいると　日焼けした若い漁夫
と肩を合わせて飲んだ　強烈な匂いのこもる透明な液体を
コップになん杯かあおり　そして歌った

夜はまた　いちめんに白い闇であった　煙るようにものと
いうものを包んでしまっている　不眠のおれの耳には　こ
んなときまって　山間をぬけてきたらしい列車の響きが
伝わり　鋭い笛が短く鳴る
見なれぬここは夢にみた海辺か　捨ててきた盆地か　岬の

ような丘陵に立って　おれは霧のなかで　灯台のようにま
たたいていなければならなかった

非売品

二〇二六年七月四日

（C）日本国際詩人協会